

氏名	三 谷 茂
学位(専攻分野)	博 士(医 学)
学位授与番号	博 甲 第 1187 号
学位授与の日付	平成 5 年 9 月 30 日
学位授与の要件	医学研究科外科系整形外科学専攻 (学位規則第 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	Prediction for Prognosis from Radiologic Measurements of Patients Treated with the Pavlik Harness for Congenital Dislocation of the Hip (Riemenbügel 法加療後の先天股脱におけるレ線計測値からの予後の予測)
論文審査委員	教授 平木 祥夫 教授 折田 薫三 教授 村上 宅郎

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

先天性股関節脱臼の治療に Riemenbügel 法が導入されて以来、その治療成績は向上した。しかし、骨成長終了時に変形性股関節症へと進展する予後不良例が少なからず残存する。経過不良例に対し様々な補正手術が考案されているが、乳幼児期に施行しないと良好な股関節成長がえられない。できるだけ早期に症例の予後を把握することが重要とされているが、乳幼児期に正確に予後を判定しうる方法は確立されていない。著者は Riemenbügel 法にて加療された96例96股の単純レ線像の各種計測値から多変量解析を行い、3才の時点で予後判定可能か否かを検討した。骨成長終了時の CE 角, Sharp 角については重回帰分析を用い、理論値と実測値との重相関係数がそれぞれ0.809, 0.652の回帰式をえた。予後良好群と不良群の判定には判別分析を用い、相関比が0.585, 正判別率92.7%の判別式をえた。この結果3才の時点ではほぼ確実に予後良好な症例を選択でき、予後判定のための有用なスクリーニング方法を作成しえた。

なお、本論文は共著論文であり、共著者の協力を得て完成したものである。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は先天性股関節脱臼に対し Riemenbügel 法にて、加療された96例96股の単純レ

線像の各種計測値を多変量解析を用いて分析し、骨成長終了時の臼蓋形態との関連性についてX線学的ならびに臨床的に研究したものである。従来十分解明されていなかった本法の乳幼児期における予後判定に関して重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。